

## 検査説明における一考察（不安の緩和）

中3病棟 発表者 松崎 栄子、山口 澄江、竹内 京子  
上条由美子

### はじめに

最近の医療においては、負荷試験、X線検査、内視鏡等の臨床検査は重要性を増すと同時に、その手技も多様かつ、複雑化した検査が患者に不安感を与えたり、更には説明不足から、十分な結果が得られないとするならば、私達も又、もう一度この問題について考えてみる必要があるかと思われる。そこで私達はまず、アンケートにより、患者の要望、不安等を把握し、それに基づいて、従来使用されていた説明書を改善し、患者の理解されやすい説明書を作成してみた。そして少しでも、患者の不安等を除去できる様、看護の面からどのような援助が必要なのか検討し、これからの看護に役立てたいと思い研究にとりくんだ。

### 研究方法

- I 検査に対する患者の状況把握
- II 検査説明書作成
- III 説明書使用
- IV 説明書改正
- V 改正説明書使用

### I 検査に対する患者の状況把握

患者の現在の検査に対する不安意識はどうか、看護者側からの説明に対しては、どのような受けとっているのかを知る為に、以下の項目でアンケートをとった。

アンケート内容 患者数 26名

1. 貴方が毎日行っている検査は、何の検査でどうして行うのか知っていますか。
2. 検査に対して不安はありましたか。
3. 検査について同室の人と話しをした事がありますか。
4. 検査時困った事等がありましたか。
5. 看護者側からの説明はどうでしたか。
6. 当日検査がある事を聞いた時がありますか。
7. 検査全般に対して要望等ありますか。

以上のアンケート結果を要約すると、

- (1) 検査目的、検査手順、注意点の説明不足。
- (2) 口頭では説明不足であり、説明書が患者の手元にあった方が理解しやすい。

(3) 検査薬の副作用に対する不安。

### Ⅰ 検査説明書作成

既存の説明書を改善し、看護者側の検査手順として使用していたものを基本に、患者の為の説明書を作成した。検査はどの科においても比較的頻繁に行われる胃透視と内分泌内科のL-Dopa 負荷試験をとりあげてみた。表Ⅰは今まで看護者側として使用していたものである。表Ⅱは患者向けに使用したものであり、表Ⅲは更に意見をとり入れ、補充訂正したものである。

表 Ⅰ

L - Dopa 負荷試験	
方 法	
朝食止め	
Vor 採血	
L - Dopa (ドパストン) 750 mg 投与	
内服後 30 60 90 120 採血	
L - Dopa 内服による副作用	
	悪心、嘔吐、立ちくらみ、めまい、唾液減少、冷汗、血圧低下あるいは上昇

表 Ⅱ

L - Dopa 負荷試験	
これからあなたが行う検査は、「 <input type="text"/> 」を調べる検査です。	
起床してから検査終了まで食事はしないで下さい。	
1. 採 血	
2. 薬を飲みます。(ホルモンを分泌させる薬です。)	
3. 服用後	
30 ( 時 分)	
60 ( 時 分)	
90 ( 時 分)	
120 ( 時 分)	
注 悪心、嘔吐 口が渇く等の症状がみられますが、薬の副作用です。嘔吐した場合看護婦に知らせて下さい。	

表 Ⅱ

L - Dopa 負荷試験	
これからあなたが行う検査は、	下垂体機能のうちの → Dr「 」を調べる検査です。起床してから検査終了まで食事はしないで下さい。〔水、番茶は可〕 → Pt
1. 採 血	
2. 薬を飲みます。(ホルモンを分泌させる薬です。)	
3. 服用後	次の時間に採血します。 → Ns
30 分後	→ Ns ( 時 分)
60 分後	( 時 分)
90 分後	( 時 分)
120 分後	( 時 分)
※ 吐き気、口が渇く等の症状がみられますが薬の副作用です。	静かに休んでいて下さい。 → Ns 吐いた場合は看護婦に知らせて下さい。

以上、順を追って説明すると、表Ⅰの説明方法は、口頭で行った。検査を行った8名の患者の意見は、

- 何の為の検査か知りたかった。
- 時間がどの位かかるかはっきりしなかった。
- 実際何時に採血するかははっきりしない。
- 手順が一度の説明では理解できない。
- 副作用はどうか。

その意見を検討し、表Ⅱの内容に書き換えて患者に配布した。その結果、新たな説明書に対し、患者、医師、看護婦の意見を取り入れ表Ⅱのように書き直した。点線内は新たに付け加えた項目。そして表Ⅱの説明書をセロケースに入れ検査内容、時間等を皮膚鉛筆で記入し患者の手元に検査終了まで置く事にした。表Ⅰの方法と表Ⅱを患者に配布する方法の2通りに対する患者のアンケート結果を次に記す。

例 Ⅰ

患者：K氏 40才 男子

病名：末端肥大症

検査終了後の患者の感想として、表Ⅰの方法に対する意見は、

- 説明は今のままでよい。
- 手順、方法は説明時理解できたつもりでも、時間がたつと理解していない事に気づく。の2点。

表Ⅱを用いた時のアンケート結果は、

○今までの説明より、手順、方法が理解しやすい。

○薬品を使用した時に現われる症状も示されているので、症状が現われても心配なくてよい。

○後日、他の病院の医師に聞かれた時、この様な検査をやったと伝える事ができる。

の3点。

胃透視検査の場合は、L-Dopa 負荷試験と同一方法で検査説明書を作成し、同一の意見を求めた。

表 I

直腸、胃部、レントゲン透視、胃カメラ受診券	
患者名	殿
1.	月 日( 曜日)にバリウム透視・胃カメラをいたします。午前 時 までに内科受付に診療カードと一諸にこの券をおだし下さい。
2.	検査当日は朝食は勿論水も薬も飲まずに来て下さい。
3.	前日又は、当日の大便を親指大量を本院指定容器に入れ氏名記載のうえ提出して 下さい。
昭和 年 月 日 担当医師	
信州大学医学部附属病院順応内科	

表 I

胃 透 視	
これからあなたが行う検査は造影剤を飲み胃を撮影する検査です。	
前日夕食後より検査終了まで食事はしないで下さい。	
場所は一階撮影室11番で行います。	
検査室に入り	
1.	上半身着ている物を脱ぎ検査着に着がえます。
2.	注射をします。(これは胃の運動をおさえる為にします。)
3.	薬を飲みます。(これは胃を大きくふくらませる役をします。その為ゲップが出 そうになりますが我慢してください。)
4.	バリウム(造影剤)は右側手の届く所にあります。医師の指示により飲んで下さ い。(300 ml 程)
5.	検査中台が横になったり、お腹を圧迫する事があります。

※ 注射の副作用として口渇、目の調節障害、動悸が現われる場合がありますが、しばらくたてば治りますので心配しないでください。又、気分が悪くなったら行って下さい。

本日飲んだバリウムが白い便となって出てきます。必要に応じて下剤投与もします。

表 Ⅰ

胃 透 視

これからあなたが行う検査は、造影剤を飲み胃を撮影する検査です。

場所：一階撮影室11番で行いをす。 → Ns

食事：前日夕食後より検査終了まで食事はしないで下さい。 → Ns

Pt (当日水分はうがい程度にして下さい。)

検査室に入り

1. 上半身着ている物を脱ぎ検査着に着がえます。

Ns (時計、メガネは、はずして下さい。)

2. 注射をします。(胃の運動をおさえる為にします。)

3. 薬を飲みます。(これは胃を大きくふくらませる役をします。その為ゲップが出そうになりますが我慢して下さい。)

4. バリウム(造影剤)は右側手の届く所にあります。医師の指示により飲んで下さい。(300 ml 程あります。)

5. 検査中台が横になったり、お腹を圧迫する事があります。

※ 注射の副作用として口が渇く、目がかすむ、胸がドキドキする場合がありますが、しばらくたてば治りますので心配しないで下さい。又、気分が悪くなったらおっしゃって下さい。

本日飲んだバリウムが白い便となり出てきます。水分を多目にとって下さい。又、必要に応じ下剤を飲む場合もあります。

結果・考察

2例にみるように、検査説明書作成前に指摘されていた説明不足、不安等はある程度解決されたと思う。やはり患者の意見をとり入れ、患者の立場にたった物の考え方をし、説明書をセロケースに入れ、患者の手元に置くよう作成した所が良かったと思う。説明書を使用した患者の意見を要約すると、

○検査の目的がはっきりして手順が良くわかる。

- 専門用語も使われていないので、内容を理解する事もでき、手元にあると忘れる事もない。
- 検査途中で守る時間、検査にかかる時間がわかる。
- 副作用が出現しても事前に知らされているので不安を感じる事が少ない。
- 老人や身体障害者向けの説明書があればよい。

看護者側からの意見として

- 統一した説明がなされ、患者の協力も得られ迅速かつ正確に検査が経過する。
- セロケースに入れた場合、患者の手元において、患者が何度も確実に理解することが出来、安心感を与える。

等の利点があげられた。入院し、数々の検査を受ける患者は、様々な不安を持っている。私達は、これらの不安等を理解して、医療者側の一方的な検査とならないよう、患者が自ら進んで協力的に検査に望んで頂ける様考えた。私達は、患者に向けてアンケートを取る事により、不安の原因がどこにあるかが明らかになり、その原因を解消する為に説明書を作成した事は、検査を受ける患者との間に、十分なオリエンテーションを行える様になった。その結果、患者の検査に対する考え方や関心の度合いが強くなり、検査を受ける態度も真剣になり、検査データとしても確実性が高くなってきたと思うし、これからもその様な方向に導かれると思われる。残された今後の課題として、老人や身体障害者向けの説明書を作成したいと思う。以上、実践の中から学び得たいいくつかの点で応用展開し、今後の看護に充分生かしてゆきたいと思う。